



# 日本整形外科学会 スポーツ医学 ニュースレター

No.13 2014年3月31日発行

## ■ 理事長ご挨拶

高岸 憲二

皆さん、こんにちは。今期理事会におきまして理事長に再選されました高岸憲二です。伝統ある本学会の理事長に再度ご指名いただき、大変光榮に存じますとともにその重責をひしひしと感じております。2期目になりますので本学会の立ち位置を明確にさせようと考えています。

日本整形外科学会スポーツ医学会は、1975年5月に大阪にて第1回会議が開催されました。その後、35年経過し、会員数2,000名を数えるまでに至りました。その基本理念は「整形外科学及び運動器科学領域におけるスポーツ医学の進歩普及に貢献し、心身の健全な発達、スポーツ外傷・障害の予防と治療等に寄与できるよう、日夜研鑽を深める」ことです。この理念を忘れることなく、理事の方々と共に努力していく所存です。

理事の先生方にはそれぞれ委員会を担当していただきたく4つの委員会を新設しました。

★専門医制度検討委員会：専門医制度の実施について検討し、実現に向けて推進する。

★情報管理システム委員会：学会会員の個人情報の取扱いについて検討する。本学会専門医制度における条件を検討する。また、スポーツ整形外科に関連する用語について審議する。

★倫理委員会：COIの取扱いについて検討し、規約を作成する。

★障害検討委員会：日本整形外科学会スポーツ委員会ならびに運動器の10年・日本協会などと連携し、競技別にスポーツ障害の予防について検討する。オリンピック、パラリンピックにおけるスポーツ傷害について検討する。また、障害者スポーツについて検討する。

近年の学術集会を振り返ってみますと第37回の岩本幸英会長、第38回の筒井廣明会長および第39回の大塚隆信会長がそれぞれ独自の企画を立てられ、実りある素晴らしい学会を開催されました。若い会員も次第に増えはじめ、GOTSトラベリングフェローを継続しており

ますし、JOSSM-USAトラベリングフェローも別府諸兄副理事長の御尽力で始めることができました。このように本学会はスポーツ整形外科学会としてのidentityが確立されてきたと考えています。

本学会の学術面ならびに委員会活動で中心になるのは代議員の先生方です。今回も新たに19名の先生方に代議員をお願いすることになりました。それぞれの地方におきまして整形外科スポーツドクターとして地方のスポーツ医学の中心的存在になっておられる先生ばかりです。しかし、診療ならびに現場がお忙しいため、学会における発表および学会誌への投稿といった学術的活動に手が回らない先生方もおられるとも聞いております。もちろん、学会の代議員の先生方が現場で活躍されるのはありがたいことですが、やはり学術団体の代議員である以上、学会発表や学会誌への投稿にも積極的であるべきと考え、まずは代議員資格の条件として学会発表の義務化について昨年9月の理事会ならびに代議員会で承認をいただきました。今後は「代議員は、学術集会活性化のため、本学会学術集会での発表（共同演者を含む）または座長を2年に1回以上務めることとする」として該当しない先生は、新たに代議員を委嘱しません。2014年に新たに代議員を委嘱された代議員の先生方からこの条項が適用され、2016年の代議員の再任条件として2014年及び2015年に学会発表（共同演者も可）もしくは座長を務めることが必要となり、条件を満たさないと2016年に新たに本学会の代議員として委嘱しない方針ですので、うっかり忘れて資格喪失をされませんようにご注意ください。

日本専門医制評価・認定機構が管理します新専門医制度など、近年、時代は大きく変革しておりますが、その変革の中でも本学会の存在意義を見失うことなく、本学会が更に発展するよう前進していきたいと考えておりますので、会員の皆様にはご協力の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

## ■ 第 39 回日本整形外科スポーツ医学会学術集会を終えて

会長 大塚 隆信

このたびは第 39 回日本整形外科スポーツ医学会学術集会を 2013 年 9 月 13 日、14 日の 2 日間にわたって、名古屋駅前のウインクあいち(愛知県産業労働センター)にて開催させて頂きました。全国各地から計 933 名もの整形外科医、理学療法士、柔道整復師、スポーツ指導者、アスレティックトレーナーなど各方面の方々が参加され、学術集会のテーマである、予防、治療、復帰、を基軸として、これらが三位一体となったスポーツ整形外科を目指して学術的、実践的な数多くの研究成果や治療方法が発表され、活発な討議が行われました。本学術集会では基調講演として東京大学大学院総合文化研究科・新領域創成科学研究科教授の石井直方先生による「筋肥大・筋力増強のメカニズム」の講演を皮切りにトレーニングに関するシンポジウム、ワークショップを企画し、参加者が最新の筋力トレーニングの理論と実践を学んで頂きました。

特別講演の講師として、元プロ野球投手で地元愛知県出身の工藤公康氏とシドニーオリンピック男子柔道の金メダリスト、井上康生監督のお二人をお招きしました。また、中京大学体育学部教授の湯浅景元先生による御講演とも合わせて選手と選手をサポートするスポーツ医学の連携について知見を深めて頂きました。

シンポジウムは、日本学術会議と日本小児整形外科学会からの共同企画を含む 11 題を企画するとともに特別セッションとして、ビデオセッションを設け国内第一線で活躍されておられる先生からのご意見や最新の手技を学ぶ事ができました。また「学生と若手医師が語るスポーツ整形外科」では 9 演題の発表があり益々盛況となりました。

海外招待講演は Freddie H. Fu 先生、Gilles Walch 先生、Alessandro Castagna 先生、そして韓国整形外科スポーツ医学会を代表して Kyung Taek Kim 先生と Hyoung-Soo Kim 先生の計 5 名の先生をお招きし御講演を賜りました。また教育研修講演は、善衆会病院院長の木村雅史先生とがん研有明病院整形外科部長の松本誠一先生に御講演して頂きました。

スポンサーセミナーはモーニングセミナー 4 演題、ランチョンセミナー 8 演題を企画しスポーツ医学、トレーニング、スポーツ整形外科における最新の情報を、予防、

治療、復帰の観点から国内外の講師の方々から御講演頂きました。

一般演題の応募演題の総数は 204 題で、この中から口演 163 題、ポスター 31 題の発表があり、シンポジウムなどとあわせて計 285 題の発表となりました。ご参加頂きました会員の皆様、関係各位の方々には改めて御礼申し上げます。

またスポーツ整形外科医、コメディカルが、実際にスポーツ活動やトレーニングの実践指導ができることを目標にハンズオンセミナー、ワークショップを企画致しました。初めての試みではありましたが、参加者の方々には大変なご好評を頂き事務局一同、安堵致しております。

学会当日の運営におきましては、学会場での混雑の緩和、研修単位の取得漏れ、情報提供の不足、演題発表でのトラブルや遅延など参加者の皆様には多々、ご迷惑をおかけすることもあったかと思えます。この場をお



写真 1：ハンズオンセミナー 筋力トレーニング



写真 2：ハンズオンセミナー 投球フォーム矯正



写真 3：ハンズオンセミナー 膝関節鏡



写真 4：井上康生監督



写真 5：会長挨拶



写真 6：工藤公康氏

かり致しまして改めてお詫び申し上げます。

現在のスポーツ医学の発達にはめざましいものがあり、科学的根拠に基づいた健康管理やトレーニング法を通して、より高いレベルのスポーツ選手の育成に貢献しています。特に2020年の東京オリンピック開催が決定し、これに向けて東京だけでなく全国においてスポーツが盛んになって行くと考えられ、本学術集会の役割もさらに重要になると思います。このような中、本学術集会を通して、最新のスポーツ整形外科について学び、スポーツによる

外傷、障害を予防し、より高いレベルの治療と早期のスポーツ復帰を可能とする整形外科スポーツ医学の発展の一助になったかと自負しております。

最後に本学術集会を開催するにあたりまして、当日の広告、寄付、労務提供や共催を頂きました企業および関係各位様、学会の運営に携わっていただきました教室の面々、並びに事務局運営を担当されました株式会社コングレの皆様にご心より御礼申し上げます。



## ■ 第40回日本整形外科スポーツ医学会学術集会

会長 松本 秀男

本年9月12日(金)から14日(日)に、この夏に完成予定の「虎ノ門ヒルズ」で第40回日本整形外科スポーツ医学会学術集会を開催します。今回のテーマは「今、スポーツ医学に求められるもの—2020に向けて—」です。2020年に東京オリンピックが開催されることが決定致しました。あと6年、我々自身が出場することはないと思いますが、スポーツ医学を志す者として何が出来るでしょうか。

本学会は整形外科とスポーツ医学全体を繋ぐ大切な学会だと思います。スポーツ医学にはスポーツ外傷・障害の予防や治療、スポーツ栄養、スポーツ心理、運動療法、トレーニング、環境、時差への適応、アンチドーピングなど様々な領域がありますが、運動器の外傷・障害の予防や治療を主に担当する整形外科の役割は極めて重要です。2020年に向けての我々の出来ることは、この「スポーツ外傷・障害の予防や治療」をさらに発展させ、選手を可能な限り良い状態で送り出すことだと思います。現在は全く名前の挙がっていない少年少女が2020年には大活躍する可能性もあります。2020年に活躍するであろう若いアスリートが障害なく2020年を迎えられる様に体制を整えることも重要です。更に、この発展を一般のスポーツ愛好家や市民のスポーツ活動に広げていくことも、我々スポーツ医学を志す者の重要な使命だと思います。

今年はソチオリンピックがありましたので、まず、そこで今回「スポーツ医学が出来たこと」を振り返ってみたいと思います。そして、6年後に向けて「何が出来るか」を検討していきたいと考えます。「スポーツ外傷・障害の予防や治療」を中心にシンポジウム9題、パネルディスカッション3題を企画いたしました。最新の知識を皆で共有しましょう。

スポーツ医学の現場では知識ばかりでなく、様々な技術も必要です。急激に進歩している超音波診断、関節外傷や障害の治療になくならない関節鏡視下手術などです。これらの技術習得を目的に少人数制のワークショップも企画いたしました。初心者からある程度の経験者まで、様々なレベルの人が学べるようにしました。人数の都合上、予約制に致しますので、これらの技術に興味のある医師、PT、トレーナーの方々は是非事前にお

**第40回日本整形外科  
スポーツ医学会学術集会**  
The 40th Annual Meeting of the Japanese Orthopaedic Society  
for Sports Medicine

会期 2014年9月12日(金)～14日(日)  
会場 虎ノ門ヒルズフォーラム  
(〒105-0001 東京都港区虎ノ門 1-23-3  
虎ノ門ヒルズ森タワー4・5F)  
会長 松本 秀男  
(慶應義塾大学医学部スポーツ医学総合センター)

[併催]  
**第12回日韓整形外科スポーツ医学会**  
The 12th Korea-Japan Joint Meeting of Orthopedic Sports Medicine

主催事務局 慶應義塾大学医学部スポーツ医学総合センター内  
〒160-8582 東京都新宿区信濃町35番地  
TEL: 03-5269-9054 FAX: 03-5269-9054

運営事務局 株式会社アサツディ・ケイ メディカル事業室内  
〒104-8172 東京都中央区築地1-13-1  
TEL: 03-3547-2533 FAX: 03-3547-2590

申し込みください。

更に、教育研修講演は一昨年の日本臨床スポーツ医学会で大好評だった東北大学加齢医学研究所の川島隆太先生の「脳トレ」の続編の他、十数題を企画いたしました。「整形外科医のための帯同に必要な内科的知識」などスポーツ医学を志すものとしてある程度知っていかないとはいけない専門外の基礎的な知識を学習できるようなテーマも予定しています。初心に戻って勉強する場にしたいと思います。

スポーツ医学を専門とする方、スポーツ医学をこれから学ぼうとする方、スポーツ医学にほんの少しだけ興味のある方、虎ノ門ヒルズを見てみたいだけの方、皆さんお待ちしております!

更に、今回は第12回日韓整形外科スポーツ医学会を併催いたします。韓国のスポーツ医学の最新情報を知りたい方、自分たちのスポーツ医学情報を是非韓国の先生方と共有したい方、是非一度は英語で発表してみたい方、皆さんもお待ちしております!

## 役員のごあいさつ

### ■ 副理事長ご挨拶

別府 諸兄  
(総務委員会 担当)

本学会は、1975年5月に第1回学術集会を大阪にて開催した整形外科スポーツ医学研究会を前身として始まりました。その後、1982年に日本整形外科スポーツ医学会として活動当初の「整形外科領域におけるスポーツ医学、ならびにスポーツ外傷と障害の研究の進歩・発展が、スポーツ医学の向上とスポーツの発展に寄与する」という考えに沿って、努力を続けてまいりました。そして、2011年12月5日付で一般社団法人として、現在は2,000名を超える会員を有する団体になりました。

私はこの度、この活気ある日本整形外科スポーツ医学会の副理事長（総務委員会担当）を拝命いたしました。今後は高岸憲二理事長を補佐し、本学会に生じる諸問題を速やかに解決し、さらに発展させていきたいと思っております。

つきましては、昨年までの12の委員会（1.総務委員会、2.財務委員会、3.編集委員会、4.学術検討委員会、5.広報委員会、6.国際委員会、7.教育研修委員会、8.社会保険委員会、9.メンバーシップ委員会、10.ガイドライン策定委員会、11.定款等検討委員会、12.学会活性化検討委員会）に加え新たに4つの委員会を加えることになりました。それは、専門医制度検討委員会、情報管理システム委員会（用語委員会を兼ねる）、倫理委員会、障害検討委員会の4つであります。

特にスポーツに関する専門医制度につきましては、本邦には日本整形外科学会認定スポーツ医、日本体育協会公認スポーツドクター、日本医師会認定健康スポーツ医の3制度があります。日整会認定スポーツ医は1986年に発足し、すべてのスポーツにおける整形外科的分野の活動を主としています。日本体育協会公認スポーツドクターは、1982年に発足し、競技スポーツを主たる対

象としています。日本医師会認定健康スポーツ医は、1991年に発足し、健康づくりのスポーツを主たる対象としています。

資格取得までのカリキュラムは、1991年に21単位を共通基礎科目とし、さらに、2011年には3制度の共通基礎科目の統合・新設を行い25単位としました。日本医師会認定はこの25単位で、日整会認定はさらに応用科目16単位、日本体育協会はさらに応用科目27科目を追加しています。

一方、米国整形外科学会のスポーツ専門医制度（Subspecialty Certificate in Orthopedic Sports Medicine, SCOSM）は1994年にAOSSM（American Orthopedic Society for Sports Medicine）がABOS（American Board of Orthopedic Surgery）に要請し、制度の在り方について正式に検討が開始されました。その後、多くの討論がなされ2007年秋に第1回のスポーツ専門医の試験が施行されました。このように、スポーツ医制度は、医療保険制度が異なることもありますが、米国のSCOSMと比較して考えることはできません。しかし、米国のみならず諸外国のシステムや現状を研究し、我が国のシステムにあったより良い制度を模索する必要があります。

2020年に東京でオリンピック・パラリンピックが開催されます。スポーツドクターの果たす役割も多くなってくると思います。それを機会に、これらの制度が整備され、より現実的な活動として、スポーツの世界に浸透していくようにディスカッションを重ねていきたいと思っています。そのためには会員皆様のご協力、ご支援の程を宜しくお願い申し上げます。

帖佐 悦男  
(財務委員会 担当)

このたび日本整形外科学会スポーツ医学会の副理事長という大任を拝命し、大変光榮に存じますとともに責任の重さを痛感致しております。本学会には1993年に入会し2010年から理事に就任させて頂き、同時期に日本整形外科学会のスポーツ委員会にも所属し、日整会のガイドラインの一つでありますアキレス腱断裂にも関わる機会がありましたので、本学会と日整会の連携に努めてまいりました。理事としては、法人化を担当し皆様のご協力のお蔭で定款が完成し一般社団法人として新たな出発をすることができました。ご協力頂きました会員の皆様にあらためまして深謝申し上げます。

今回は、財務担当の副理事長を拝命致しました。本務として、本学会ならびにスポーツ医学の発展に貢献すること、理事長の負担を軽減すること、麻生先生が実施されてこられました財務の健全化を引き継ぎスムーズな会の運営にあたることを考えております。財務に関しましては、当たり前ですが支出を減らし、収入を増やす必要があります。先生方のご協力が必要不可欠です。支出を減らす対策として、Web会議の推進、連絡業務の簡略化などがあり、法人化におきましても事務局と連携することで弁護士や公認会計士を通さず最小限の予算で実施することができました。ちりも積もれば山になりますので少しずつでも削減することで、学会発展のために必要不可欠なことには大型予算を抛出できるようにしたいと思います。収入に関しましては、広報委員会や編集委員会など関係の委員会と連携し、広告費用や寄付金などを少

しでも増やせるよう努力致します。ご協力をよろしくお願い致します。

また、学会の活性化やスポーツドクターを含めた subspeciality への対応も重要な課題と思っております。スポーツ医学の発展に整形外科医やその代表的学会であります本学会が果たす役割は重要であり、メディカルスタッフ、他職種、指導者などと、より一層連携することがスポーツ医学の発展につながると考えております。また、トップアスリートだけではなくスポーツ愛好家や市民に対し運動器の面を中心にしながらもトータルに評価・指導できるスポーツ医になれるよう学会としても取り組み、スポーツドクターのみならずメディカルスタッフの育成や市民への啓発活動を行っていきたくと思います。スポーツ医学に関し外傷・障害が発生した場合、早期診断・早期治療が重要なことは至極当然ですが、予防医学により一層重点をおく時期がきていると思います。学童期から運動・スポーツや学童期検診を通して、日整会の進めるロコモティブシンドロームの啓発や予防に貢献したいと考えています。また、障害予防を進めることで、外傷や障害のために運動やスポーツ活動を断念せざるをえなくなる選手やスポーツ愛好家を減らせればと思っております。

浅学非才の身ではございますが、本学会の伝統を継承し、ますます発展できますよう誠心誠意努力する所存です。どうかご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。



## ■ 理事ご挨拶

**柴田 陽三**  
(編集委員会 担当)

日本整形外科学会スポーツ医学部の会員の皆様今日は。この度、本学会の編集委員会担当理事を拝命致しました。伝統ある本学会の理事に就任し大変光栄に存じますと共にその責任の重さをひしひしと感じております。

学会誌の発刊は整形外科学スポーツ医学に関する情報発信とその記録という非常に大きな役割を担っております。スポーツ医学の研究分野は健康の増進、競技能力の向上、スポーツ障害の予防、障害からの復帰プログラム、手術治療、後療法、選手・指導者・医療従事者との連携など多岐にわたります。本学会はこうしたスポーツに関わる医師、スポーツ科学者、コメディカルの研究発表の場であり、これらの連携は本学会の目的を達成するのに必須であります。学会誌はその研究活動の集大成で、新たな発展を目指すための出発点とも言えます。学会誌の速やかな発刊、内容の一層の充実をはかり、研究成果を地道に発信し続ける事が日本のスポーツ医学の発展に貢献できるものと考えています。情報の発信をよりスピーディーに、そして学会員の利便性を向上させるため、学会誌のオンラインジャーナル化が望ま

ます。実現にむけて検討をして行きたいと思っております。

これまでも整形外科医はスポーツ科学者や、コメディカルの方々と集学的な研究を行ってまいりましたが、こうした試みを一層進め、そして研究の成果をスポーツ現場にフィードバックできるよう各種競技団体との連携を深めて行きたいと存じます。2020年には東京オリンピックの開催も決まり、本学会の果たす責任は一層重大です。これまで以上のスポーツ現場とスポーツ医学との密接な連携が必要とされています。

また日本は満65歳以上の高齢者が人口の1/4を占め、先進国中最も早く超高齢化社会を迎えました。スポーツ医学の研究によって得られた知見を健康増進、ロコモティブシンドロームの予防に応用し高齢者が健全な生活を送れるようにしなければなりません。こうした観点からも本学会の社会に果たす役割は非常に大きいものと言えます。

いずれも非常に大きなテーマであり、甚だ浅学非才の身ではありますが、本学会の発展に寄与してまいりたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

**石橋 恭之**  
(学術検討委員会 担当)

この度、伝統ある日本整形外科学会スポーツ医学部の理事に就任させて頂き、また学術検討委員会を担当することになりました。本学会の会員の皆様にご場をお借りして感謝を申し上げますと共に、新任のご挨拶を申し上げます。

整形外科は言うまでもなく全身の運動器を対象とする診療科であり、その運動器におけるスポーツ外傷と障害の対象疾患は多岐にわたります。その治療にあたっては、傷害された部分を治すだけでは外傷治療と何ら変わらず、再発予防も含めて多面的なアプローチから治療を進めるのがスポーツ整形外科です。こうした観点から考えると、様々な分野の整形外科専門医が一堂に会し横断的にスポーツ傷害を考えることが必須であり、日本整形外科学会スポーツ医学部の存在意義があります。本学会

では、これまで大学生・高校生のためのスポーツ医学セミナーなど様々な活動を行って参りましたが、学会においては学術活動が最も重要です。学会で有意義な討論を行い、スポーツ傷害に悩む選手を少しでも減らし、スポーツ医学の発展に寄与していかなければなりません。

ところで2020年の夏季五輪・パラリンピック開催都市が東京に決定しました。第2回目の東京五輪が素晴らしい歴史を作るよう、国民全体がまともにならなければなりません。また、我々整形外科医、スポーツをテーマとする本学会の役割は益々大きくなっていくと思われま。本学会がスポーツ医学の基礎的研究・臨床研究を推進させ、より良い医療を提供できるよう、微力ながら努力していきたいと思っております。ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

## 酒井 宏哉 (広報委員会 担当)

会員の皆様、このたびは日本整形外科学会スポーツ医学会の理事に私を再選していただきありがとうございました。今後も本学会の発展に寄与していく所存ですので、どうぞよろしく願いいたします。

委員会では引き続き広報委員会を担当させていただくことになりました。私と広報委員会の関係は長く、2001年に本委員会のメンバーとしての活動を始めたのを機会に、2005年からは委員長を拝命し、その後アドバイザーとして委員会活動への参加を続け、前々回の選挙にて、理事に選出していただいたのをきっかけに担当理事に任命していただき、このたびまた広報委員会担当を続投させていただくという経緯です。

この委員会の活動内容は、以下がその主なものです。

1. 「スポーツ損傷シリーズ」というパンフレットの作成。これまで24種類が完成しました。これは患者さんに病状などを説明する際に用いることを目的に作成されたもので、パンフレットの内容は、本学会のホームページ(<http://www.jossm.or.jp/series/index.html>)で閲覧可能です。事務局あるいは製作を依頼している三笠製薬株式会社の担当者にご連絡いただければ、パンフレットの原本をお渡しすることが可能です。是非、日常診療にご活用いただきたいと思います。

2. ホームページの作成。これまでホームページの充実をめざして活動をしてきましたが、まだまだ本学会のホー

ムページの内容は他の学会のものとは比べても決して十分なものとはいえません。各委員会や会員からご意見をいただき内容の充実に努めていきます。また、本学会の運営資金獲得のために、ホームページにバナー広告をさせていただく企業を募っておりますが、企業が広告をだすかどうかの判断はそのホームページの閲覧回数によって決まってきます。どうぞホームページへの頻回のアクセスをお願いいたします。

3. ニュースレターの作成。ニュースレターは、雑誌の発行を除くと、本学会の活動内容を会員に知ってもらうための重要な手段です。ただし、紙媒体の情報提供はどうしても俊敏性に欠け、またコストもそれなりにかかります。将来的には他のいくつかの学会が行っているように、電子メールを用いたメールマガジンとしての情報提供に切り替えたいと個人的には思っておりますが、会員のメールアドレスの把握率は現在70%程度で、とても十分なとはいえません。まだ未登録の会員におかれましては、事務局へのメールアドレスの登録を是非お願いいたします。また、せっかく登録していただいたメールアドレスを連絡方法として用いないのも、登録していただいた会員に対して逆の意味で失礼であるという面もありますので、今後、提供する情報の内容によってはメールでのご連絡も並行して行っていきたいと思っております。

## 菅谷 啓之 (国際委員会 担当)

このたび日本整形外科学会スポーツ医学会の理事を拝命し、大変光栄に存じますとともに責任の重さを痛感致しております。本学会には1993年に入会して以来、スポーツ選手の肩関節・肘関節障害の治療を自分のライフワークと定め、学会発表や聴講を通じて深く本学会と関わらせて頂いてきました。一時膝関連を一括りにということでJOSKASと統合された時期もありましたが、やはり現在のようにスポーツ医科学に重点をおいて独自に活動していくべき学会だと思っております。各専門分野における健康スポーツからアスリートに対する対応、さらに専門分野を超えたスポーツ医科学が我々が深く関わっていくべきテーマと考えております。特に2020年の東京五輪に向けて、アスリートを如何に外傷や障害から高いレベルで復帰させるかは、我々がスポーツ整形外科の専門医として研鑽を積んでいかねばならない永遠の課題であると考えています。

担当委員会としては、別府諸兄副理事長の後をうけ、国際委員会を担当させて頂くことになりました。2010年より国際委員を拝命しておりましたが、今回担当理事の大役を仰せつかり身の引き締まる思いであります。別府副理事長によれば、国際委員会の役割は①GOTS/JOSSM/KOSSM Traveling Fellow、JOSSM-USA Traveling Fellow、②日韓整形外科学会合同会議、③日米整形外科学会合同会議の連携と協調を図ることであるとありますが、本学会における国際委員会の歴史や経緯を踏まえて、上記任務を通じて本学会員の国際化、とくにglobalな視野を持った若手学会員の育成に特に重点を置いて頑張っていく所存です。浅学非才の身ではございますが、本学会の伝統を継承しつつ益々発展できますよう誠心誠意努力する所存ですので、どうかご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。



**久保 俊一**  
(教育研修委員会 担当)

今年2月のソチオリンピックでは10代から40代まで幅広い年代の選手の活躍に日本中が盛り上がりました。また、2020年の東京オリンピック開催も決定したことで日本のスポーツ界全体が世界から注目され、スポーツ医学教育の重要性が今後ますます高まるものと考えます。スポーツにおいて障害や外傷の予防が重要であることは論を待ちません。本学会では、治療に携わる医師やパラメディカルスタッフに限らず、スポーツを実践するすべての人々および指導者も対象として、研究成果を含めた情報を発信する活動に力を入れています。特に大学生・高校生に対しては毎年スポーツ医学セミナーを施行しており、成長期のアスリートが正しい知識を持ってスポーツに取り組めるように努めています。

スポーツ医学の対象者は、小学生から高齢者、また障害をもつ方など多様です。スポーツの目的も純然たる競技から、レクリエーション、あるいは健康維持と多岐にわたり、指導者のレベルもさまざまです。そうした中、昨今のインターネットの広がりにより、誤った情報がまことしや

かに広がる可能性も危惧されます。一般社会に正しい情報を発信していくために、広報委員会など他の先生方との連携も重要だと考えています。

医師をはじめ医療を提供する側には、スポーツ実践者のニーズを理解した上で、正しい知識とインフォームド・コンセントのもと、心のこもった臨機応変な対応が求められます。その一方で、スポーツ医学を志す多くの若い医師に対しては、基本的な治療方法や方針の習得がおろそかにならないよう配慮する必要があります。適切なスポーツ医療実践に有用な教育研修のさらなる充実に努めたいと思います。

平成27年度には本学会学術集会を主催させていただきました。学術集会準備も進めつつ、3年間の経験を生かし、教育研修担当理事としてスポーツ医学の発展にさらに貢献したいと考えています。そのためには学会員の皆様のご協力が不可欠です。今後ともご指導およびご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

**稲垣 克記**  
(社会保険委員会 担当)

高岸理事長による新たな体制のもと、日本整形外科学会スポーツ医学会の理事に就任させていただくとともに、社会保険委員会を担当させていただくことになりました。日本整形外科学会のスポーツ担当委員も務めさせていただきます。

近年、トップアスリートや若い世代の一般スポーツ選手だけでなく高齢者のスポーツの必要性が求められています。この社会情勢の中で正しくスポーツ活動を広めスポーツ医学の実践、障害・外傷の予防を研鑽してゆく必要があります。本学会は日本整形外科学会とスポーツに関する最も重要な橋渡しとなる学会と位置づけられています。今後、日本整形外科学会会員やスポーツ専門医が本学会を通してスポーツ選手を実際に現場でいかに活躍してゆくかを考えていかねばいけません。私は学生時

代に国体代表選手であり、また日本代表ナショナルチームの帯同医師として国際試合の舞台で多くのことを学ばせていただきました。近い将来、本学会を通してこれらの現場で活躍出来るスポーツ専門医を育てて行きたいと考えます。

また、微力ではありますが社会保険委員会の担当理事として、診療報酬に関する事案に取り組みたいと思います。約7年以上東京都労災保険診療委員を務めさせていた事もあり、スポーツ関係の手術や診療報酬が保険上合理的なものとなるようにして社会の構築にますます寄与できるよう、微力ながら尽くしていく所存です。学会員の皆様には、ご指導およびご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

**松田 秀一**  
(メンバーシップ委員会 担当)

この度、伝統ある日本整形外科スポーツ医学会の理事に就任させて頂くことになりました。身に余る光栄であり、その責務の重大さを痛感しております。スポーツ医学における整形外科医の役割が非常に大きいことは論をまちませんが、他診療科の医師、理学療法士、トレーナー等との共同作業なくては適切な予防、治療を行うことはできません。そのような意味におきましても、本学会は整形外科が中心となり、スポーツ医学をより発展させていく上で非常に重要な学会であると理解しております。2020年にはオリンピックが東京で開催されます。スポーツへの関心は益々高まることとなり、本学会は更に大きな役割を果たしていく必要があります。私は、本学会の理事に選任されるのは初めてのことで、九州大学に在籍していた時に第37回の本学会学術集会の事務局を担当させて頂きました。職種の垣根を越えて充実した討論がなされる本学会の素晴らしさをひしひしと感じることができま

した。これからは、学会の更なる発展のために努力していく所存であります。

理事就任と同時にメンバーシップ委員会を担当させて頂きたくこととなりました。本学会がスポーツ医学、医療の発展に寄与するためには学会員の増加、および学術活動の活性化は必須であります。今後は、是非学会員を増やすことができるよう努力していきたいと思っております。それと同時にスポーツ医学というものは様々な分野の人が関心をもっている領域でもありますので、入会審査につきましては十分、慎重を期して行うつもりであります。

微力ではございますが、高岸憲二理事長はじめ副理事長、理事の先生方のご指導を賜りながら、本学会の運営にかかわって参る所存でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

**田中 康仁**  
(ガイドライン策定委員会 担当)

この度伝統ある日本整形外科スポーツ医学会の理事に就任させて頂き、大変光栄に存じております。私は1995年に、本会の第5回GOTSトラベリングフェローに選出され、ドイツ、スイス、オーストリアを1ヶ月かけて研修旅行をさせて頂きました。ドイツ語圏における整形外科の考え方や技術はもとより、一生の友といえる友人と巡り合うことができました。またこれを契機として視野を世界に広げる重要さに気づくことができ、将来の目標と研究の方向付けを決定することができました。整形外科医としての心のよりどころになるような貴重な経験をさせて頂きました。スポーツ整形外科医を目指す若手の先生方にも、是非同様の経験をさせていただきたいと考えております。

また、現在アキレス腱断裂の診療ガイドラインを担当させて頂いております。初版はアキレス腱診療ガイドライン策定委員会の委員長をされていた伊藤博元先生をはじめ、諸先生方のご苦勞で2007年に出版されております。この分野は日進月歩で、最近特に注目されてきて

いるのではないかと感じております。現在その改訂作業を行っており、新しいエビデンスを皆様にお届けすべく帖佐悦男委員長をはじめ多くの先生と一緒に、精力的に取り組み、任期中に新しいバージョンを上梓できるように最大限の努力をいたします。

さて整形外科にとりまして、言うまでもなくスポーツ医学は大きな柱であります。東京オリンピックの開催決定は、長年閉塞感を持った我々の気持ちを、前向きに明るくさせてくれるビッグニュースでありましたが、本会にとりまして更なる大きな飛躍のチャンスであると思っております。オリンピックへの関心もこれから一層高まってくると存じます。一人でも多くの若手の先生方がこのテーマに取り組めるよう、またやり甲斐を持って診療や研究に傾注できるよう、私なりに力を入れていきたいと考えております。本会の更なる発展のために邁進する所存でございます。皆様の暖かいご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

**土屋 弘行**  
(定款等検討委員会 担当)

この度日本整形外科スポーツ医学会理事に就任させていただきました。2020年に東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定し、今後ますますスポーツ医学への注目が集まり、需要も高まってくると思います。これまで整形外科医は主に治療、外科手術においてスポーツ医学の中心的役割を担ってきましたが、今後は理学療法士やトレーナーなどと協力して、スポーツ外傷や障害の予防、スポーツ復帰へ向けたリハビリテーションなど外科治療だけでなく幅広い活動を科学的に検証していく中心的役割をこなす必要があると考えます。また、スポーツ医学に

関する新しい検査法や治療法の開発、治療成績の報告などを全国で共有し、優れた研究成果を世界に向けて発信するためには本学会の発展と充実した学術集会の開催が不可欠と考えます。そのためには若手スポーツ整形外科医の育成とスポーツ指導者を含めた準会員数の増加が必須と考えます。

本学会が魅力あふれ、本邦のスポーツに係わる全ての人にとって有益な情報を提供できる学会になるよう尽くしていく所存です。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

**西良 浩一**  
(学会活性化検討委員会 担当)

このたび日本整形外科スポーツ医学会の理事という大任を拝命し、大変光栄に存じます。私は昭和63年徳島大学を卒業後整形外科教室に入局いたしました。入局と共に、スポーツグループに所属しました。テーマは少年野球の野球肘で、河川敷で少年野球検診、少年サッカー検診を熱心に行っていました。卒後7年目、脊椎スポーツ医学へ専門領域を変更し現在に至ります。当初は発育期のスポーツ障害である腰椎分離症の診断法、治療法の確立に全力を注ぎました。2012年帝京大学溝口病院への異動をきっかけに、成人アスリートに多い椎間板障害へも研究内容を広げました。病態の根本である椎間板内に直接内視鏡を挿入し、病態観察できるという画期的手技により、椎間板内の病態解明を行いました。現在、徳島大学整形外科では脊椎・関節両面からスポーツ医学を中心として教室運営にあたっております。本学会の発展に寄与すべく、教室を挙げてスポーツ医学発展に全力を注ぐ所存です。

また、同時に学会活性化検討委員会を担当させてい

ただくことになりました。本学会は、一時演題数・参加者数が減少し弱体化した時期もありましたが、高岸憲二理事長、筒井廣明（前）担当理事など諸先生方のご尽力で、演題数および学会参加者数も増加し、ここ数年で盛り返してきました。確かに、スポーツ医学の中心的役割は整形外科医が担うべきですが、同時に現場でアスリート治療に携わるATおよびPTを中心としたコメディカル役割も重要です。これからの本学会の活性化、進歩・発展のためには、学際的領域から成り立つ総合医学的活動に加え、フィールドワークが主体の実践医学的活動を広げるためには、コメディカルとの連携が重要です。学術集会では、整形外科医のみならずコメディカルの方達さらにはアスリートの方達を交えた現場に近いディスカッションも大切です。アカデミックでありながらフィールドの現場に最も近い討論の場を提供することでさらに活性化につながるものと思います。今後とも、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。



**田中 寿一**  
(専門医制度検討委員会 担当)

この度、理事を拝名いたしました。私にとって本学会は、第1回 GOTS-Traveling Fellowとして、また当教室が第25回本学術集会を主催させていただいた時の運営に当たったことなどにより、とりわけ思い入れの多い会です。今回は、2回目の執行部入りとなります。前は広報委員会を担当しましたが、今回は新たに設けられた、専門医制度検討委員会を担当することになりました。

さて、スポーツ医を目指して整形外科に入って、いざスポーツ整形をしようとする日整会・日体協・医師会がそれぞれのスポーツ専門医として認定しています。以前私が、日整会のスポーツ委員をしていた時にこの3つを統合しようと議論しましたが、日体協は競技団体のための認定であり、医師会は全開業医のためのスポーツに理解のある医師を作るという目的があり、スポーツ傷害治療に直接関与する整形外科スポーツ医とは、根本的な関与の違いから一本化運動を断念した経緯がありま

す。その後、JOSSM から JOSKAS が分離しています。今では日整会スポーツ認定医の下に、2つの任意整形外科スポーツ学会が存在するという歪な現状があります。さらに日本臨床スポーツ医学会が存在します。この現状は、これからスポーツ医を志す若い整形外科医にとって、決して好ましい状態ではありません。また、専門医制度を考えると、日整会スポーツ認定医がそのままの形で再認定されるとは考えにくい現状があります。なにより同じ構成員の整形外科医が複数の学会に所属し、同じ様な発表を繰り返し、認定料や年会費を複数に支払うという無駄があります。スポーツ整形を志して整形外科医になった若い医師に整形外科学会が一丸となって“国民スポーツ”のケアに中心的役割を担ってサポートしている体制を残すべきと思います。今後、日整会と協力し日整会が認定している専門医の実質的受け皿としての役割を本学会が担うべく努力したいと思っております。

**中村 博亮**  
(情報管理システム委員会 担当)

このたび伝統ある日本整形外科学会スポーツ医学会の理事に就任させていただくことになりました。名誉であると感じるとともにその重責を痛感しております。

ネット社会の到来により、ちまたにはあらゆる情報が氾濫しています。容易に情報取得が可能になった反面、情報の管理、特に個人情報の管理は日々その重要性を増しています。このような状況にあって、本学会では情報管理システム委員会が新設され、私が担当させていただくことになりました。何分不慣れなため、諸先輩や理事、監事の先生方、委員の先生方のご指導とご協力を仰ぎながら、活動していきたいと考えております。また同時に一般社会へはスポーツ医学に関する正しい情報を発信していくことも重要で、本学会がその役割を担うべく、広報委員会の先生方との連携も模索していきたいです。

また、これまで学会レベルで認定してきた専門医制度は大きく変わろうとしており、現在日本専門医制評価・認定機構が中心となって進めている新専門医制度は、近々

新たに発足する新機構（日本専門医機構・仮称）に引き継がれることとなります。新制度では国民目線からの専門医制度の構築を目指しており、その情報を正しく会員に伝えるということも本委員会の使命ではないかと考えています。

また、この夏には『第14回大学生・高校生のためのスポーツ医学セミナー』を大阪市立大学で行わせていただくことになりました。われわれの大学は皆様方には少々馴染みが薄いとおもわれる大阪市の南部にありますが、本年3月には日本一の高さを誇るあべのハルカスが近隣にオープンします。教育研修委員会の先生方と連携を取りながら、開催準備を進めておりますので、学生の方々のみならず、先生方も是非お越しいただければ幸いです。

本学会がますます本邦のスポーツアクティビティの向上、健康寿命増進に寄与できるよう微力ながら尽力致す所存ですので、学会員の皆様にはご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

## 丸毛 啓史 (倫理委員会 担当)

この度、日本整形外科スポーツ医学会の理事に選任され、倫理委員会を担当させていただくことになりました。微力ではありますが、本学会の発展のために尽力したいと存じます。

さて、国民が運動・スポーツ活動に従事する時間は、年々、増加傾向にあります。健康増進あるいは健康寿命延伸のために運動・スポーツは不可欠であるという意識も浸透してきています。国の施策においても、文部科学省は、2011年にスポーツ基本法を制定し、スポーツ振興を国家戦略として位置づけています。厚生労働省は、身体活動・運動が循環器疾患やがんの発症予防、高齢者の認知・運動機能などの社会生活機能に関係することを踏まえ、平成25年度から10年間の健康日本21（第二次）で、「歩数の増加」や「運動習慣者の割合の増加」などについて、数値目標を掲げて振興を図っています。2020年の東京オリンピック開催が決定したこともあり、今後、国民の運動・スポーツに対する関心は更に高まっていくと思います。

本学会は1975年の創設以来、整形外科領域にお

るスポーツ傷害を主体とするスポーツ医学の向上とスポーツの発展に寄与してきました。近年では、スポーツ医学の最後のフロンティアとされる予防医学に大きな関心が寄せられ、適切なプログラムによるトレーニングで、スポーツ傷害を予防できることが高いエビデンスで示されるようになってきました。スポーツ傷害のリスクをゼロにすることはできませんが、有意義な研究の成果に基づいて訓練技術、器具、スポーツ会場、およびルールなどを改善することによってリスクを下げることは可能です。こうした分野での更なる研究振興を図るとともに、他職種や各種競技団体、地域組織等との連携を深め、その成果を現場にfeedbackしていく必要があると思います。

スポーツは常に定められたルールの下で行われます。倫理委員会では、様々な事案に対する科学的正当性と倫理的妥当性について、専門的な判断を行うこととなります。この際、一般の立場の人、外部の人の意見を反映しながら正しいルールを守ることを最優先として活動していきたいと考えております。

皆様のご支援、ご協力を心よりお願い申し上げます。

## 奥脇 透 (障害検討委員会 担当)

このたび、日本整形外科スポーツ医学会の理事に就任させていただくとともに、新設される「障害検討委員会」を担当させていただくことになりました。外傷を含め、スポーツによるさまざまな障害は、アスリートばかりでなく、チームにとって、あるいはもっと広い視野から見ると、我が国の国際競技力向上にとっての損失となります。そのためにスポーツ障害の予防は、スポーツ整形外科の分野で何よりも重要な課題となってきています。理事として、また障害検討委員会担当として、取り組んでまいりたいと思います。

一口にスポーツ障害といっても、年齢、性、スポーツ種目、スポーツレベル、あるいはポジションなど、さまざまな要因によって、その意味合いは異なってきます。とくに成長期にあるジュニア世代のスポーツ障害は、競技特性に直結した部位に起こりやすく、その後のパフォーマンスにも大きく影響しています。しかし、その実態が明らか

になってきていても、一向に無くなっておらず、競技種目によっては、むしろ増加傾向を示している場合もあります。その原因の一つには、親を含めた指導者のスポーツ障害に対する認識の低さがあります。このためスポーツ障害を予防するには、単に医療サイドだけで取り組んでもうまくいきません。指導者側あるいは競技者側に立った視点から提案し、一緒になって推進していく必要があります。

ジュニア世代だけでなく、スポーツ愛好家、トップレベル競技者および障害者スポーツなどを含め、スポーツ障害の予防に取り組むにあたって、まずはさまざまなスポーツ障害について、その実態を明らかにし、そしてその原因を探り、予防へとつなげていくきっかけができるように、微力ながら貢献して行きたいと考えています。そのためには、本学会の先生方のご指導およびご支援が欠かせません。皆様、どうぞよろしくご支援申し上げます。

## ■ 監事ご挨拶

藤 哲

高岸理事長より、2年間監事の役を仰せつかりました。年齢を考えると、役員としては最後の奉公となります。

私は、2008年7月から2年間理事長として日本整形外科スポーツ医学会 [JOSSM] に関わりました。当時の大きな懸案事項は関節鏡と膝とスポーツを一緒にした学会 [JOSKAS] が新たに組織化され、多くのJOSSMのメンバー（理事クラス）が抜けたことでした。しかも、抜けられた方々は、私と専門は違ってもいずれも私が昔から一目置いて尊敬してきた先生でした。そんな状況下では、誰も理事長などやりたがらないのも宜なる哉とっていました。

しかし、私が推薦されたのは地域的にもJOSKASから離れた弘前所属でありしかも膝から離れた手が専門ということで、私ならそう激しいバトルにはならないだろうと、

いわゆる buffer として推薦されたと自覚していました。

そんな状況の中、理事長を引き受けたのですが、いきなり事務局の移転問題が発生したり、17年振りにやっと漕ぎ着けたハワイでのアメリカ整形外科スポーツ医学会 [AOSSM] との Combined Meeting が開催1ヶ月前に起きた地震・津波のため中止になったりと、大変な時期でした。

いろいろなことを山積みに残した為か、理事長任期を終えた後もアドバイザーで理事会に参加するように、理事長より言明されました。また今回は監事としてきちんと学会の運営を見据えているようにとのこと。なかなか学会から抜けられない状況となっています。宜しくお付き合いください。

武藤 芳照

この度、藤哲先生と共に、本学会の監事を務めさせていただくことになりました。名誉会員、代議員、会員の先生方には、何卒宜しくご高配を賜りますようお願い申し上げます。

元々、私は、中学・高校・大学時代に水泳部に所属して、長年スポーツ活動に親しんだという縁で、スポーツ医学を志し、名古屋大学整形外科学教室（中川正教授：当時）の門を叩き、整形外科スポーツ医学の道に入りました。

大学院学生1年の折、杉浦保夫助教授（当時）に連れられて、本学会の前身である第2回整形外科スポーツ医学研究会（東京：岸記念体育館）に初めて参加して以来、実に38年、東京厚生年金病院、東京大学、日本体育大学と所属は変わりましたが、一貫して本学会に参画させていただきました。この間、本学会を通して、大学や医局の系列を超えて、数多くの先輩から様々なことを学ぶことができました。また、疲労骨折、水泳障害等の学会発表、論文執筆、共同研究等を介して、全国の新たな仲間づくりができたのも、本学会のおかげです。

平成20（2008）年7月4日（金）、5日（土）の2日間、「スポーツ外傷・障害のメカニズムと予防」をメインテーマとして、第34回学術集会の会長を務めさせていただくと共に、その内容を『スポーツ医学実践ナビ-スポーツ外傷・障害の予防とその対応-』（日本医事新報社、2009年）の単行本として発刊できました。

振り返ってみれば、私が昭和50（1975）年3月、大学医学部を卒業して以来の一人の医師としての歩みと、本学会の歴史の歩みが同じであるのは、嬉しい巡り合わせと感じています。

そうした本学会への愛着と感謝の念を抱いている私としては、今般の監事の役目は大変光栄であり、本学会への恩返しと思っています。

高岸憲二理事長をはじめ、理事の先生方の執行業務を拝見しつつ、規則と手続き面の立場から、公平・公正な運営がなされるように、尽力することが使命と認識しております。また、一人ひとりの会員が、本学会に入会して良かったと率直に思っただけのような組織の基盤づくりに、いささかなりとも寄与できれば幸いです。



## ■ GOTS-JOSSM-KOSSM Traveling Fellow 報告記

奈良県立奈良病院整形外科 岡橋 孝治郎

<はじめに>

日本整形外科スポーツ医学会から第23回 GOTS Traveling Fellowship に選出され、2013年5月17日から6月16日まで渡欧して貴重な体験をさせて頂く機会を得ました。

GOTSはGesellschaft für Orthopädisch-Traumatologische Sportmedizinの略でドイツ語圏のスポーツ整形外科の通称であり、ドイツ・スイス・オーストリアの3国を中心に組織されています。本年度は日本から私と金沢大学整形外科の中瀬順介先生、韓国からKim Jinsu先生とKim Jeong-Woo先生の計4名がGOTSへ派遣されました。フランクフルト空港で合流し、学会開催地であるマンハイムまで4週間に及ぶ旅が始まりました。訪問した施設は順にKlinikum Osnabrück (Osnabrück)、Ev. Waldkrankenhaus Spandau (Berlin)、UKH Salzburg (Salzburg)、LKH Stolzalpe (Stolzalpe)、AKH Wien University Hospital (Wien)、MZA Medizinzentrum Alserstraße (Wien)、Universitsspital Basel (Basel)、Kantonsspital Liestal (Liestal)、Clinic Linde (Biel)、ARCUS Kliniken Pforzheim (Pforzheim)、ATOS Klinik Heidelberg (Heidelberg)です。各々の施設を訪問し、手術・病院見学、観光、食事を満喫しました。最終訪問地はMannheimでGOTS congressに参加しました。各訪問先の詳細は中瀬先生が学会誌に報告されますので、本誌では個人的に興味を抱いたことを報告します。

<手術>

どの施設も麻酔科・看護師との連携が見事で、手術場の回転が速く驚きました。欧米人は日本人に比べ、不器用との先入観がありましたが、訪問先のオペは非常にスムーズで考えを改めました。特にProf. Dr.Schmidtが活躍されているARCUS Kliniken Pforzheim (Pforzheim)は手術場スタッフのプロ意識が高く衝撃的でした。また、PF障害で世界的に有名なProf. Dr. BiedertがいるClinic Linde (Biel)で反復性膝蓋骨脱臼に対するTrochler plastyを見学できたことも印象的です。手術見学ですが、フェロー4人で話し合い、興味ある手術に助手として入ることが可能でした。私の場合、

膝関節がメインで、他に肩関節鏡の手術を学びました。日常業務で膝関節以外の手術に立ち会う機会が無い私にとって、GOTS fellowで専門分野以外の手術をじっくり見学できたことは非常に新鮮で勉強になりました。

<食事>

朝食はホテルで、昼食は手術場、夕食は接待というのが基本です。夕食は毎日が歓迎会・送別会でなかなかハードでした。この季節はアスパラガスが旬でしたので堪能しました。

<観光>

数多くの世界遺産を見学しました。中でもザルツブルク、ベルンが印象的です。共に町自体が世界文化遺産に登録されており非常に美しい町でした。その他、ウーンベルリンでは歴史的にも貴重な博物館を見学しました。学生時代、世界史を選択していればもっと感激していたと思います。いずれもHost側の先生が綿密な計画を立て案内してくれますので安心・快適でした。

<GOTS fellow 応募を考えておられる先生方へ>

‘百聞は一見に如かず’ 貴重な経験になります。是非、トライして下さい!

<おわりに>

振り返ってみると、あっという間の4週間でした。出



写真：ハイデルベルクにて：左から中瀬順介先生（金沢大学）、Kim Jeong-Woo先生、筆者、Kim Jinsu先生

発前はちょうど、韓国との領土問題などが生じ、少し不安を感じていましたが、実際は全く問題無く、楽しく充実した旅でした。本当にこの4人で良かったと感謝しています。訪問先では、いつも手厚い歓迎を受けました。これは、20数年に渡るGOTS Traveling Fellowの交流でドイツ・スイス・オーストリア・韓国・日本に信頼と友好

の関係が構築されている証であると思います。日本整形外科スポーツ医学会の国際委員会の先生はじめ、関係者の皆様に深謝いたします。今後、私も貢献できるように精進したいと考えています。本当に有難うございました。

## 2013 JOSSM-USA Travelling Fellow 報告

昭和大学藤が丘病院整形外科 西中 直也

2013年、7月10-25日の間にJOSSM-USA travelling fellowとしてシカゴ、ニューヨーク、ナッシュビル、およびサンフランシスコの4都市を回ることが出来ました。AOSSM（シカゴ）に参加し、ニューヨークではHospital for Special Surgery（HSS）とColumbia University Medical Center、ナッシュビルではTennessee Orthopaedic Alliance Center、サンフランシスコではStanford University Sports Medicine Centerをそれぞれ訪問しました。基本的には各病院で手術見学、自分達のプレゼンテーションを含めたカンファレンス、外来見学が主な内容で、夕食では最高のお食事、お酒を準備してくれていました。夕食はどこでも彼らが厳選してくれたであろうレストランばかりで、お酒の力を借りながら、ざっばらんに日米の整形外科の現況などについて熱く語りました。そのほか、送迎にリムジンが用意されていたり、記念にネクタイやポロシャツ、現地のTシャツをプレゼントしてもらったりなどいずれの訪問地でも最高のおもてなしを受けました。日本整形外科学会という組織の後ろ盾あつてのことなので、あらためて学会の素晴らしさ偉大さを感じました。今回の訪問に尽力もらった国際委員をはじめ諸先生方にこの場を借りて感謝申し上げます。訪問しての感想を報告としていくつか致します。

まず、AOSSMに参加してびっくりしたのは日本人の発表者が口演で一名、e-postterで一名のみと極端に少ないことでした。この学会は演題が非常に少なく、採用されるのは至極困難ということですが日本のスポーツ整形外科のレベルであればもっと採用されてもいいはずだと感じました。各施設では大変良くしてもらったのですが、日本人は彼らを含めて多くのアメリカ人医師の名を知っている、逆に彼らアメリカ人が知っている日本人は数えるほど（当然、僕の名前は知りません笑）が現実でした。実際に施設での見学ではたくさんレベルの高い部分を感じましたが我ら日本人が極端に遅れていることなどは決してないはずで、日本人も英文を書かなくては勝負できない



写真：ナッシュビルでのDr Allen Anderson（来年のAOSSMの会長）ほかとの夕食。Sushi レストランで。

いと痛感しました。自分にもっと英文があれば、自分の名刺代わりに読んでもらえる、読んでもらえれば自分のやっていること、自分の考え方がより伝わりやすいはずです。日本のスポーツ医学レベルが世界一になり、それをもっとアピールする国になりたいと思いました。

また小生は以前から、日本に野球肘で困っている少年が山ほどいるのにアメリカではほとんどいないことが不思議でなりません。そこで彼らにこの事についてお話しました。最も印象深かったのはDr. Marc Safranの『アメリカでは、プロ野球選手で活躍するために、少年期は肘を酷使せず、投球数も考え肘を大事に扱う、これに対し日本ではプロ野球選手になるために練習に練習を重ね、肘を酷使するのは。』との言葉でした。的をついた、とても考えさせられる言葉でした。

最後になりましたが、三谷先生、原田先生に感謝述べたいです。お二人とでなければこのような充実した、楽しい旅路にならなかったと思います。初日に初めて言葉を交わした三人ですが親交を深めることが出来ました。このお二人、アメリカでは訪問先のdoctors方との出会いを宝にして今後、日米の懸け橋なれるよう努力していきたいと思います。



## 2013 JOSSM-USA Travelling Fellow 報告

東海大学大磯病院整形外科 三谷 玄弥

え、これホント? いやいや Really?

Chicagoに着いて早々、我々Fellow達は真っ青になって顔を見合わせました。

「申し訳ないけど急遽不在にするので、自分たちで他の訪問先をさがしてね!」という一通のメールが最終受け入れ先から送られてきたのでした。遠のきそうになる意識を取り戻し、日本の事務局や諸先生方と連絡を取りあった我々に与えられた最終的な mission は「Stanford の Dr. Marc Safran を探し出し、新しい受け入れ先になってもらうように直接交渉をせよ!」というものでした。

AOSSM 最終日の学会場を探して歩き、ついに器械展示場で Dr. Safran を発見! 直接、受け入れをお願いする交渉を行いました。火事場の馬鹿力で僕の英語力が急に上がったのか?あまりに情けない顔でお願いしたからか?どうかはわかりませんが・・・

ちょっと tight schedule だけど今から君らの訪問をアレンジしよう! というお返事をいただいたのでした。

そんなハプニングから始まった我々の旅ですが、7月10日出国から26日帰国まで盛りだくさんの充実したものとなりました。

7月11-14日 Chicago での AOSSM Annual Meeting に参加した後 New York へ、15日 Hospital for Special Surgery (HSS) では Dr. Marx の膝、肩を中心とした豪快な手術を見学し、16-17日 Columbia University Medical Center では Dr. Bigliani と Dr. Levine に大変お世話になりました。

18-19日 Nashville では Tennessee Orthopaedic Alliance の Dr. Anderson に完璧な attend をしていただきました。なかでも Dr. Byrd の股関節鏡は素晴らしいテクニックで、大変勉強になりました。

22-24日 California の Stanford University Sports Medicine Center では、外来見学、テニストーナメントの観戦、早朝カンファレンス、股関節鏡や膝靭帯再建を中心とした手術見学など盛りだくさんのスケジュールでした。Dr. Safran は世界的に有名であるにもかかわらず、誰に対してもフレンドリーに接する素敵な方でした。後日、東京オリンピック招致が決まった際には祝福のメールを頂き、そのやさしさに感激しました。

Columbia 大学と Nashville ではカンファレンスで発表

をする機会を頂きました。私は Tibia Rotational Technique to Drill Femoral Bone Tunnel in Anatomic Double Bundle ACL Reconstruction という内容を発表しました。留学経験のある西中先生や、完璧な準備の原田先生と比べ見劣りする私は、前夜 Bar に忘れてしまったため、着るジャケットがないというエピソード(実話)で先に笑いをとり、厳しい質問を回避することに成功したのでした。

今回、渡米してから訪問が決まった HSS と Stanford の手術室受け入れには、予防接種の履歴や、各種抗体の有無など severe な immunization の書類提出を求められました。健診データをもとに後輩に書類を作製、PDF で送ってもらいなんとか切り抜けたのですが・・・。来年以降の先生たちには事前に準備しておくことをお勧めします。

道中、この状況を打開するのは難しいんじゃないかと心折れそうなハードルもありましたが、西中先生、原田先生という素晴らしい仲間と知恵を出し合い、乗り越え、学んで過ごしたこの2週間は一生の思い出であり、今後の糧にしたいと思います。

最後に高岸先生、麻生先生、松本先生ほか理事の先生方には、事前の organize のみならず渡米中の後方支援、叱咤激励を頂いたおかげでこの充実した旅を



写真：お世話になった Safran 教授と

過ごせたと感謝しています。

各所で素晴らしい歓迎をうけたこと、特に Dr. Safran が突然の申し出にも関わらず快く受け入れてくれたことなどは、別府先生をはじめ諸先輩方が長年国際舞台で友

好を深めている“縁”のおかげと感じました。

今後は自分たちがその“縁”をつなぐ一人となりえるように、精進してまいりたいと思います。本当にありがとうございました。

## お知らせ

### 1. 代議員資格継続条件の変更について

2013年9月の理事会において、代議員資格継続要件に「学術集会活性化のため、本学会学術集会での発表（共同演者発表、一般発表、講演、シンポジウム、パネルディスカッション等）または座長を2年に1回以上務めること」を加えることが承認されました。

2014年9月に代議員に就任・継続される先生より（2016年9月に任期満了）、上記の継続要件が適用されますことをご承知おさください。詳細については、本学会HPにてご確認ください。

### 2. 学会HP閲覧のお願い

本学会ホームページでは、各研究助成やTraveling Fellowの募集、関連学会の会告など、日々、情報を更新しています。今後もホームページの充実を図っていきたく存じますので、是非、お時間がございます際には本学会ホームページをご覧くださいませよう願います。（URL: <http://www.jossm.or.jp>）

### 3. American Journal of Sports Medicine (AJSM) の購読について

本学会の会員は、American Journal of Sports Medicine (AJSM: 年12冊発行) を特別優待価格で購読することができます。

	一般価格	特別優待価格
AJSM 購読	\$183.-	\$102.-
オンライン購読	一般向けサービスなし	\$ 30.-

AJSM 購読、オンライン購読のどちらにお申し込みいただいても、1972年の創刊号以降の全刊行物にアクセスが可能です。特別優待価格での購読を希望される会員のかたは、事務局あてメールにて購読希望である旨をご連絡ください。（[info@jossm.or.jp](mailto:info@jossm.or.jp)）追ってお申し込みについてのご案内をお送りしますので、各自購入手続を進めてください。

### 4. 会員登録情報の変更について

勤務先、自宅、メールアドレスに変更がありましたら、お早めに事務局あてメールにてご連絡ください。（[info@jossm.or.jp](mailto:info@jossm.or.jp)）ご連絡がない場合、学会雑誌をはじめ事務局からのご案内がお手元に届かないことがありますのでご了承ください。

## 編集後記

第39回本学会は、2020年のオリンピックが東京で開催されることが決定した直後に開催されました。大塚隆信会長はじめ関係者皆様のご尽力に加えて、オリンピック招致決定の勢いを得た学会は、非常に充実した活気あふれるものとなりました。そして迎えたソチでの冬季オリンピックとパラリンピックでは、選手のひたむきな姿に多くの人たちが感動するとともに、大いに励まされました。

会員の皆様におかれましてもスポーツの底力を肌で感じる事ができた1年であったのではないのでしょうか。スポーツ選手や愛好家の傷害を治療や予防することが我々の主たる務めであります。しかしながら、スポーツが成立するためには、スポーツを見る人たちやスポーツを支えるすべての職種の人たちの存在は欠かすことができません。私たちはそうした、スポーツに関わる全ての人たちにもスポーツ整形外科のすばらしさを知っていただかなくてはなりません。「東京オリンピックに医師として関わりたいので整形外科学を志した」という学生や研修医の先生方が近い将来、本学会で活躍されることも楽しみです。

オリンピックのうねりに乗って、本学会がこれまで以上に多くの人たちから認知され、親しみをもって迎え入れて頂けるようになることを祈念いたします。  
(大槻伸吾)

日本整形外科学会 スポーツ医学会 ニュースレター No.13 2014年3月31日発行

編集：日本整形外科学会スポーツ医学会広報委員会

酒井 宏哉(担当理事)、亀山 泰(アドバイザー)

大槻 伸吾、金岡 恒治、平野 篤、村 成幸、安田 稔人、山崎 哲也

発行：一般社団法人日本整形外科学会スポーツ医学会

〒102-8481 東京都千代田区麹町 5-1 弘済会館ビル 株式会社コングレ内

TEL 03-3263-5896 / FAX 03-5216-3115

E-mail [info@jossm.or.jp](mailto:info@jossm.or.jp) URL <http://jossm.or.jp/>